

岩手郡医報

昭和56年9月-No.5-

編集／発行

岩手郡医師会



裏岩手連峰に囲まれた松川けい谷

岩手郡松尾村寄木の八幡平温泉郷から松川温泉へ向う途中、森の大橋上流に位置す。特に観光化されないままの渓谷であり、人知れぬその自然是、美しさを秘めているようです。

また、この一帯から松川温泉へは、ブナ、ナラなどの原始林が密生する山間であり、秋にはことのほか色鮮やかな紅葉が楽しめます。

秋を迎えて静かに遊歩してみたいものです。

(土谷病院 中輕米)

行事関係報告

1 日医関係

(イ) 7月30日医師年金制度の推進について通牒あり

2 県医師会関係

(イ) 7月24日薬物乱用防止月間について
(ロ) 7月30日労災医部会幹事推せんについて
協議の結果下記の先生を推せんす。

記

早藤一雄先生

(ハ) 7月31日岩手県特定疾患の治療研究事業
実施要綱の一部改正について
(二) 8月4日県医理事会及郡市医師会長会議
(i) 代議員提出議題について
(ii) 故佐々木会長の功労金について
(iii) 社団法人岩手県医師会医療従業員の退
職金積立制度について
(iv) 其の他

3 郡医師会関係

(イ) 会員の移動

(i) 入会

中村隆二先生 8月1日 土谷病院へ
岩手医大より

(ii) 退会

玉山長悦先生 7月31日

西根病院長より上田病院長に

赤羽輝雄先生 7月31日

渋民中央病院より転出

(ロ) 県医野球大会のメンバーを下記の通り和
賀医師会に送付す。

記

総監督 近藤純造

監督 秋浜 晃

P	武内 健一	C F	佐々木久夫
C	宮沢 譲	R F	高橋敏之介
1 B	佐藤 郁郎	補欠	高橋 司
2 B	西島 康之	"	遠藤 哲夫
3 B	嶋 信	"	鈴木 武敏
S S	中村 朗	"	八角 正司
L F	本山 渉	"	土谷 邦彦

(ハ) 8月1日臨時総会

於鶯宿温泉 ホテル加賀助
総員64名、出席30名、委任状27名
欠席7名なり。

提出議題

昭和55年度一般会計、休祭日当番医補助
金会計並特別会計の決算について

(i) 一般会計

歳 入	2,013,225 円
歳 出	1,973,583 円
差引残高	39,642 円

翌年度繰越

(ii) 休祭日当番医補助金会計

歳 入	3,272,237 円
歳 出	3,240,548 円
差引残高	31,689 円

翌年度繰越

(iii) 特別会計

歳 入	3,892,485 円
歳 出	1,598,190 円
差引残高	2,294,295 円

翌年度繰越

以上全会一致承認せらる。

(二) 医学講演会

8月1日臨時総会に引き続き実施す。

講師 岩手医大教授 加藤政孝先生

演題 心電図について

(三) 野球練習試合

8月2日午前10時零石町南畠小学校校庭に於て8月23日県医野球大会の出場準備をかねて盛岡地区薬店外交員と一戦を交える。

医師会側前夜の疲労回復せず又今夏一番の猛暑のため若い外交員チームの軍門に降る。戦績は5対4で惜敗。

(四) 県医野球大会

8月23日於北上市内10球場。

私共岩手郡チームは本年度優勝候補の筆頭にあげられており、西根病院配慮のマイクロバスにて8月22日午後4時県医師会館前集合、一路南下北上市プラザホテルに到着。簡単な前夜祭を実施、明日の試合に供えて当医師会としては珍しく前夜祭を早く切上げる。夜半台風15号がホテルの窓に吹きつけ明日の試合があやぶまれる。

案の定、午前8時野球試合中止決定。同8時30分よりプラザホテルに於て開会式を行う。同10時より大会規定によりプラザホテル大広間の懇親会場壇上にて試合組合せ通り「ジャンケン」により9人対9人の試合を行い岩手郡チームは1回戦氣仙チームなるも相手チームは台風による水害のため棄権す。2回に於て和賀チームに惜しくも敗れる。次の敗者復活戦に於て堂々の勝利を收む。尚記念撮影の際は賞状の「敗者復活」の箇所に割り箸の袋をさいて貼りつけて撮影す。

(ト) 8月25日午後6時30分よりA会員全員に対し医療従業員退職金積立制度の説明会を

玉山村中央公民館にて行なう。

(チ) 理事会

8月25日医療従業員退職金積立制度説明会終了後玉山「ふるさと」にて行なう。

協議事項

(イ) 岩手県立沼宮内病院より申入れありたる結核病床20床を一般病床に転用の件

(ロ) 岩手県医師会より申入れありたる医師会病院に対する考え方について

4 公正取引委員会より

都道府県医師会及各区、郡、市医師会の実態に関するアンケート調査に関する統計についての資料送付せらる。

内容的に疑問もあり、都市医師会には余り関係なし。只開業の際の入会金等について、1医師会をもって800余の医師会をみらる、は遺憾の極みなり。

5 保健所関係

(イ) 7月30日つづが虫病の予防対策について

(ロ) 8月27日午前10時より岩手保健所管内の環境衛生大会が西根町体育館に於て開催される。祝詞の要請あり。

(ハ) 8月28日午前10時より盛岡保健所管内の環境衛生大会が滝沢村中央公民館に於て開催せらる。

祝詞の要請あり。

以上



無題

玉山長悦

日頃尊敬することのなかった佐々木一夫先生の御急逝にあい、この誌をかりて深い哀悼の意を捧げます。

もう25年も前のことになりますが、私が医者になって初めて勤めた黒沢尻病院に赴任した頃、新富町に借家して住むことになりました。

その新富町には、当時の郡医師会長の遊佐良雄先生や、県議員でもあられた佐々木一夫先生、そして布佐忠且先生の三人の錚々たる先生方が開業しておられました。また黒病の事務長であった狩野徳治さん（現花巻医師会長隆一先生の父）もそこに居を構えておられ、狩野さんのお世話で私も新富町の隣組の仲間入りをさせていただいたのでした。

狩野事務長はマージャンが好きで、佐々木先生、布佐先生の中に招かれてお相手願ったのが近づきの最初でしたが、なにせ大先生方の前に伺うことで、恐る恐るお邪魔したこと覚えております。腕の程は記憶から薄れてしましましたが、お相手の後に催された万酒の席で先生方の聲咳に接して、どの先生も魅力があり、お人柄に傾倒してしまって声がかかるのを楽しみにしたものでした。酒贱な一夫（いっぷ）先生には殊に温い心のふれあいを感じとったものでした。

何の会食だったか忘れてしまいましたが、ある日ある先生が、医は仁術の話しを持出しました折に、一夫先生が強い姿勢で反論なさったことを今でも覚えております。その方も私が尊敬していた先生の一人でしたので、一夫先生の真

意を汲みとることが出来ませんでした。ことに晩年には佐々木先生が医の倫理を説かれるようになり、益々私にはかつてのことが頭から離れませんでした。

しかし、いわて医報No.364号に掲載された先生の御遺稿“仁には遠く”の序文を読むに当って、初めて先生の人生観と倫理観を知るに至りました。

“医師になって、おこがましくも「医の仁」を目指したことは言うまでもない。しかしながら、「仁」への道は努めても、なお及ばざること、はるかに遠かったことは、私の行状が示すところである”と。

「仁」とは誰もが志さねばならぬもの、口に出すはおこがましいもの、「仁」とは努めても及ばざるものなのだ。草場のかげからそれ以上余計なことを云うな、まだお前は分っていいと云われそうなのでやめますが、感にうたれました。

8年程で北上を私は去りまして、その後は一夫先生にはお会いする機会が殆んどなくなりましたが、勤務医部会を再び御教示戴くことが出来ました。

佐々木先生は県医師会長として多くの業績を残されたことは枚挙に暇がないのですが、わけても勤務医部会の設立は快挙がありました。

大阪に次いで全国に先がけて二番目に設立されたわけですが、県医師会内にも反対があったと聞きますが、敢て英断なされた由であります。

武見会長は勤務医部会の設立には今なお賛成

しておりませんが、武見会長をして向後動向を見守ると迄軟化の姿勢をとるようになったとも聞いておりますが、今後の医師会のあり方を先取りしたものとして高く評価されるべきものと思います。設立以来、医療面での開業医と勤務医との連携が進み、学術面での提携によって色々と成果をあげて参りました。

このように、先生は、学と術の充実のために渾身の努力を払われたのですが、さらに機会あるごとに、医の倫理と医道の高揚を説かれて参りました。

このたびの突然の訃報に、余りに偉大で余りに期待の大きかった先生だけに、口悔しくてなりません。仁には遠くに申されたように生存の倫理を唱破された先生は万才を叫んでお亡くなりになったものと思います。

御冥福をお祈りします。

附 記

釈尊がいわれる生病老死の四者を救えるものは医師のみであると、ある宗教家は唱破しております。医が求める究極は、人間の生存と幸福を追求することである筈だし、仁とは人二で、人と人との間即ち人間の間で成立するものであります。いやしくも術を与えることのみをもって医とするはその道に反するものであります。

メジコエコノミックスの欠陥はここにあります。建物の威圧感と器械の冷酷さに、温みを感じなくなったとの声を多く聞きます。この救済には大学教育に求めたいのであります。速やかに医学の哲学と、医の倫理を講ずるよう望んでやみません。佐々木先生の遺稿を借りて所見を申し添えました。

最後に、岩手郡医師会のみなさん、七年間本当に世話をになりました。実は今私は郡医師

会の名簿を前にして各々方についての思い出にふけっております。そして一人一人にお礼を申し上げております。有難うございました。

ことに上野会長、役員の方々御苦労様でした。七年前と比べて会員数も倍近くにもなりましたが、みんなが協力して地域医療の推進に努力して参りましたことに多大の敬意を払います。

佐々木県医師会長が生前私に、「玉山君、上野先生を大事にしろよ、あの人を失ったら岩手郡医師会は大損失だよ」と申されておられましたが、上野会長のもとに、そして上野会長と共に協力して益々岩手郡医師会が発展することを希望してやみません。

一言お別れの挨拶を申し述べました。



鳴呼あの頃（その四）

上野精三

1 入隊1ヶ月を経過して

帝国陸軍軍人となり漸く1ヶ月を経過し、いくらか兵隊らしくなり、先に教えられた「一つ軍人は万事要領を本分とすべし」を多めよりも身につけて幹候一同和気藹々として目中の猛訓練も苦にならず、且つ疲労の恢復も一夜眠れば翌朝は完全恢復の状態でした。

2 頭髪の問題

入隊前々日地方の床屋で三分刈りとし所謂坊子頭になって入隊した訳ですが、1ヶ月も過ぎると大部長くなり、猛訓練で発汗すると頭が痒くてたまりませんでした。誰言うとなく一兜班長に願い出て散髪のため夕食後の外出を頼んでみようと云うことに衆議一致し、代表が話した処班長は「バリカン」を持って来て軍隊では散髪はお互いにすることになっているとの達しあり、地方であれば間違なく許可になるけれどここ軍隊は娑婆と違って駄目、折角の夜間外出の計画は挫折す。

一兜班長曰く、地方の床屋は三分刈り、五分刈り、角刈りと色々あるが、軍隊の床屋は虎刈りと段々刈りの二種類だけ。それでも帽子をかぶれば見えないから心配するな、とのことなり。お互い刈り取りをやっても最初はうまく出来ない、現制度の理容試験を受ければ全員落第間違なしです。

3 三陸地震海嘯の朝

連日の猛訓練で疲れ果て安眠熟睡中の3月3日黎明と払暁の中間頃兵舎がガタガタゆれて目を覚ますが横着者揃いで、誰一人起き出す者が居ない。そのうち山形県出身のK、薬剤官候補生が、“何処かの海で鰐が大きな口を開けて水を呑んだり吐いたりして居るな”と言った。一同そうだそうだと言うけれど未だ誰も起き上る真面目な者は一人もない。や

がて寝台の後の整頓棚の私物箱の上に整理整頓してある軍服が崩れ落ちてきました。誰かが、皆起きようやと言ったら、軍人は慌てては戦に勝てないと云う者あり、各自床の中に勝手な口の利き放題なり。隣接の現役兵の班は相当騒しい。まもなく非常召集の喇叭が鳴り出した訳です。この喇叭には横着者も抵抗できず、急いで兵舎前に整列すると週番司令殿より“かなり大きな地震なる故火災の発生に注意せよ、詳細未だ不明、情報の入り次第に連絡する”とのことなり。現在の様に通信施設も整わず、ラジオはあったけれど兵舎内は禁止、テレビなんて噂にも聞いたことなしです。地震も稍々下火となり班内に帰って朝食迄の間一服し乍ら鰐談義で賑って居りました。地震のため朝食は一時間程度遅れるとのこと、朝食後8時30分頃岩手県知事より連隊に電話があり、三陸沖地震にて海嘩が発生岩手県の海岸地区は被害甚大なりと、仍而海岸地区出身の兵はすぐ帰す故準備するとのことなり、携行品は、携帯口糧甲（米麦）4日分、全乙（乾麺麯）3日分、金は兵隊の月給3ヶ月の前渡し（1ヶ月の兵隊の俸給10円50銭）とのことなり。昼食時に師団軍医部長より衛生部幹部候補生より何名か救護班要員として派遣させるかも知れざる故準備すべし、とのこと。岩手県出身者は私独りだけなる故必ず要員に当選？するものと覚悟が出来たけれど、心中穩かならず。なぜなら当時は東北本線のみで自動車とてなく、親譲りの二本脚の行軍のみである。半ば観念して居た処救護班は在盛岡部隊騎兵3旅団、工兵、盛岡衛戌病院より派遣せられたる故待機解除の連絡あり、一同安堵の胸を撫で下ろした訳で

す。一同日く、人騒せな鯨だ、獲って焼いて喰おうと。

4 陸軍記念日の演習

3月10日は戦前陸軍記念日として帝国陸軍にとって最も意義のある日です。明治38年3月10日日露戦争の勝利の日で満州派遣軍司令官元帥陸軍大将大山巖が奉天城に入場、日露戦争の勝利の終結をみた日です。現在〇〇記念日と云えば仕事を休んで朝寝する日と決っておりますが、当時の陸軍記念日はとんでもない演習の日です。先ず演習前日つまり3月9日準備として9日と10日の2日分の食餉を1日に食う訳です。

3月9日の朝食	午前6時
" 昼食	" 9時
" 夕食	" 正午
3月10日の朝食は3月9日の午后3時	
" 昼食は "	6時
" 夕食は "	9時

1日に2日分の食事をして兵隊の背負の定量（三八式歩兵銃空砲を含めて）32匁に、幹部候補には特別に外一品（料理にあらず）、瓦斯探知器、防毒面、鉄條鍔等の内一品を持たされ各分隊に1名宛配属となり、所謂副分隊長見習の形で参加させられました。何分昭和8年は雪の多い年で1.5米の積雪が残っていました。雪の降る真夜中、つまり3月10日午前0時喇叭と共に勇ましく營門を出で雪の中で分隊戦斗、小隊戦斗を繰り返し、最後は桜花の名所弘前公園にて中隊対抗戦斗で弘前城に人梯子にて登る訓練をし、演習終了の喇叭で終ります。終了後弘前城広場で師団長閣下の閱兵式です。あの深い雪も兵隊が肩を組んで何回も往復行進すれば瞬く間に平地となりました。この頃は疲労困憊その極に達し、肉眼覚めたるも心眼眠れりの状態でした。只軍歌を歌えば物が見えるだけで当時行軍中の軍歌は如何

程士気を鼓舞したかわかりません。今頃こんなことを言ったなら若い人達に叱られるかも知れませんが。夢遊病者の様な恰好で軍歌にひきづられ乍ら午后9時帰營。空腹甚しきも10日の食事は9日に全部食べてしまったため何も食う物がないと完全に諦めて居りましたが豈はからんや軍隊はよい所で、加給品と称して酒2合、乾麺麭1ヶ、沢庵漬若干支給せられ明11日朝食迄の生命の維持が出来た訳です。そして明朝の起床1時間延期で、ありがたや、ありがたやでした。

5 外出に際して

漸く日曜外出も許される頃となって来た訳ですが、少々意地悪のS特務曹長が日曜出勤です。格勤精励の人と思いきや、さにあらず私共幹候補生に外出の注意をするための出勤です。私達は外出許可願を書いて一兜軍曹より外出証（5.0纏四方の木片）を貰い直立不動の姿勢をとり、誰々候補生本日外出して参ります、と声高らかに称えて営舎前に行くと、S特務曹長が待って居り、外出する幹部候補生全員集合との命令です。何の説教かと思ったらS特務曹長曰く、幹部候補生が外出すると必ず若い美人と散歩して居る。後での若い美人はどこの人かと言うと君達は必ず郷里の従妹が来たと言うがあの美人は弘前の女だ。いくら君達が「従妹だ、はとこだ」と云っても弘前の女は頬がリンゴの様に赤いのですぐ解る。まあ二人で散歩するのもよいが、君達は兵隊だと思って最後の突撃は絶対にするんじゃないよ、解ったか。はい、解りました。毎年幹部候補生は若い女と問題を起し、苦情が来て自分（人事係特務曹長）、教官、中隊長、連隊附中佐官（古参中佐）が後始末をお詫びで大変なんだよ。よーし外出して良し。いやははや、これで第二の閑門突破、第三閑門は表門衛兵に敬礼する丈。漸く7時間娑婆の

空気を吸いに出る訳です。一番最初は入隊の朝竹○旅○の若い女中さんとの約束を果すため、つまり焼き魚と豆腐汁で白い御飯を食うため全員揃って竹○旅○に行き食事をした訳です。おいしかったですよ。

私達幹部候補生の最も樂しかるべき一週一度の外出も毎回S特務曹長の中隊舎前に於ける説教には飽き飽き致しました。人事係特務曹長として格勤精励と言えば聞えがよいが、何か幹部候補生に対して恨みを持っているの

か、つまり10ヶ月経過すれば階級が追い越されるのに対しての嫉みか、又趣味とすれば甚しき悪趣味と思われてなりませんでした。そこで私達一同軍服を着用中は最後の突撃は止めよう、地方人になってから突撃しようと云うことにして衆議一沈した訳です。

次回は弘前に於ける衛生部幹部候補生の長男対二、三男の差別について書きます。

以上

落

餓

鬼

T M

痴性豊かなばあさん達の話 3つ。

"おまえに"と云う歌があるようですが、今から35年も前、私が鈍感な弱輩の頃、83才のおばあさんが毎日のように診療所に来ていた。ある時介助の看護婦がいない折、私にソロソロとニジリ寄ってきた。"ばあさんなんだ、血圧測りに来たのだべ、それ測ってやるから腕を出して" "うんにア、おれはおめえさんのキワに居ればそれでいいのす、そんたなごとしねえてもいいす。"

"いやどでんした"

猫も犬も腹を上にして寝ている暑い夏のさ中、76のばあさんに往診した。嫁さん、"ばあさん、なんだでばまんつ、先生に見られるでねエか、かぐせではば、かぐせではば、はやぐ"

編集後記

うだる様な暑い7月で農家のの人達は、これならば何んとかなるかと思ひきや、あの台風15号で又々落胆の日々を強いられている。

今回の点数改正についての武見会長のコメントの中で、①収支がマイナスになる医療機関が多いということはない。②新点数に対応していない。例えば技術報酬として受けるべきものを請求していない。③薬が40%以上を占めている

ばあさん、"うんだがアうんだがア、見られてもいいどもアサペネエもんでな アハハハ そんでもなあ昔は……"

いやはや参った。

菖蒲の頃ばあさん達が詮議していた。

"あそこのかがさん年頃の娘二人もあって何して出ことになっただんベエ" "なんだかおやじにいい人が出でだと云う話しだども" "でもそんたなごどできるおやじでもねエがな" "そんだでば" "かがさまが云うのに、おらあよぐわがらねどもセックどがしてくれねエがら出るとヘッてるど"

"ハァー、もももとくに過ぎでいるのになんたることだべ"

いや、まったく まったく。

所は赤字になる。日医が指導している医薬分業を実践していればプラスになる。④収支の上がらなかつたところは薬づけ、検査づけをやつた証拠を出しているようなものだ。(日本医事新報No.2987 p.128)と云われているが本当だろうか、物と技術を分離する概念からだと云われているが我々眞面目にやっている田舎医師はこれに同意出来るだろうか。諸先生は如何に思いますか。

(M)